

慶應義塾大学学術情報リポジトリ  
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	世界の言葉とつき合うための導入教育： 第二外国語導入教材《複言語のすすめ》の構想と実践
Sub Title	Plurilinguale Sprachkompetenz : Neuorientierung, Konzeptbildung, Praxisbezug : Ein Plädoyer für die mehrsprachige Vielfalt
Author	森, 泉(Mori, Izumi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2008
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.44 (2008. ) ,p.47- 78
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20080930-0047">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20080930-0047</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 世界の言葉とつき合うための導入教育

## ——第二外国語導入教材

### 《複言語のすすめ》の構想と実践——

森 泉

#### 序

本論に入るに先立って、2006年末に外国語教育研究センターにより行われた実験授業『複言語コミュニケーションクラス<sup>1)</sup>』について触れておきたい。この実験授業は2006年度より文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業学術フロンティアにより慶應義塾大学で開始された「行動中心複言語学習プロジェクト（Action Oriented Plurilingual Language Learning Project）」（以下AOPと記す）の一環として、2006年11月6日から12月18日まで計6回にわたって行われたもので、今回の試みに至る予備実験と位置づけられる。授業の目的は「学生を多言語状況（9言語）という場に置き、言語（言語学習）に対する考え方や言語能力がどのように変化するのかを観察し、複言語の視点から考察する。」というもので、具体的には「母語と第1外国語、第2外国語、第3外国語の影響関係」「外国語（習得）に対する考え方の変化」「他の外国語や他の文化・世界への関心の高まりの度合」を学生へのアンケートとインタビュー調査で明らか

1) 「複言語」と並んで使われる言葉に「多言語」がある。「多（multi-）言語」と「複（pluri-）言語」との違いは次の点にある。多言語が、多くの言語が一社会の中に独立した状態で存在することであるのに対し、複言語は、複数の言語が、一個人の中でコミュニケーション能力として補完的・有機的に結び付いた状態で存在することを指す。詳しくは、p. 53 参照。

かにしようというものである。実際に行われた授業における各回のテーマは、1) 挨拶 2) 買い物 3) レストラン 4) 町の地図 5) ダイレクトメソッド体験（スペイン語） 6) クリスマス となっており、各回とも文・経・法・商・理の各学部から1年生を中心に計5～10名程度の参加者があった。この中、全ての授業に参加したのは2名であった<sup>2)</sup>。

この実験授業はその後に予定されていた複言語関係の実験授業について、その意義を確認するための試みだったこともあり、まとまった成果を出すにはいたっていないが、詳細に書かれた各回の授業レポートや学生のコメント、実験者による分析や今後の課題などは色々な面で示唆に富む。以下、幾つか興味深い点を挙げてみよう。

まず全体を通して目につくものとして「面白かった」「楽しかった」という学生の反応がある。これは、どの回の学生コメントにも必ず現れている。その理由として、普通の授業でなく自由参加の授業であったため、もともと言語に興味のある学生が集まったという事情はあるにしても、色々な言語に触れ、実際に自ら発音して異言語を体験し、また各言語の歴史等の背景を知ることによって一層興味が深まったという意見はかなり多かった。しかしながら、一方で、授業内容というよりは、独特の授業スタイルゆえに興味が持てたということも考えられる。これは、例えば、スペイン語の石井康史氏によるダイレクトメソッド体験授業が好例と言える。「複言語状況」での多言語授業というのは、殊に6回程度の授業では、どうしても内容が表層的な形に終わってしまうために、体感的な要素が強く、良い意味で参加型、別な表現をすればパフォーマンス型の授業となり、学生の興味を引きつけやすい。多言語という授業コンセプトゆえに「面白かった」のか、個性的で素晴らしい教授法ゆえに「面白かった」のか、この点は確かに議論の余地があろう。

---

2) 文学部1年の男子学生と理工学部1年の女子学生。なお、この実験授業にはドイツ語、フランス語、イタリア語、ロシア語、スペイン語の教員7名が参加した。筆者も、一回だけではあるが参加した。

実験者による分析の中で目を引くのは、学生の興味が言語を通して地理的・歴史的な広がりを持った言語文化に向かっていくという指摘である。昔から、「言語の授業」を「文化の授業」と位置づけている教員は少なくないが、コミュニケーション能力の向上を授業に求める学生が多い今日にあってもこのベクトルは無視できない要素であることが分かる。また一方で、「こうした授業を通して、外国語を学ぶということが、厳格な学問を学ぶことではなく、もっと「普段着」の日常コミュニケーションを真似るような気楽な作業であることが分かった」という学生の感想が、「こちらの意図する「外国語を習得する際の考え方の変化」につながっていった。」という分析も、言語学習の位置づけにとって重要な観点であろう。

総括では「今回の実験授業は、多言語環境に身を置くと我々はどう反応するのか、他の言語や文化に対してどう感じるようになるのか、ということについての調査分析であり、複言語教育実験の第1ステップと見なすことができる」と記されている。以上の予備実験を踏まえ、本論では、第2ステップとして、日本の大学の現状に即した言語導入教育を具体的に教材の形で提言する。

## 1. AOP プロジェクト《複言語のすすめ》

### 1.1. はじまり

2007年秋、金田一真澄と筆者のあいだで、複言語主義の立場に立った、第二外国語の導入教育教材開発のプロジェクトが企画された。我々はこの企画を始めるにあたって、二つの問題を設定した。一つは、極めて現実的な要請から出てきたもので、英語重視の社会的風潮がますます強まっている現在、英語以外の第二外国語学習の意義を伝え、併せて様々な言語の面白さを伝えられるような導入教材を作れないかということ。二つ目として、今回の教材開発を通して「日本にふさわしい複言語教育のあり方」とはいかなるものかを模索することであった。2006年末に行われた『複言語コミュニケーションクラス』は複言語主義に立つものではあるが、ヨーロッ

パ言語主体で極めて実践的であり、文字通り「ヨーロッパ共通参考枠」<sup>3)</sup>内での複言語体験が想定されている。それに対し我々が新たに構想するのは「ヨーロッパと状況の異なる日本で、CEFRに沿った複言語教育は果たして意味があるのか？」という問い合わせである。これは、例えば単にアジア言語が含まれていないという類いのことではなく、そもそも、日本においてヨーロッパのような複言語状況が必然的・不可避的に日常に存在するかという問題でもある。一般に状況が異なれば、そこで目指される教育の目標も異なってくる。近い将来も含めて日本の社会を見た場合、少数の例外は散見されるとしても、CEFRが前提とするようなヨーロッパ的言語状況は、日本においてはリアリティーを持ち難い。しかし、このことは複言語主義の意味を全否定するものではない。我々が本論で目指すのは、一言で言えば日本の現状に相応しい複言語主義の立場に立った第二外国語学習導入教材の作成である。

## 1. 2. 教材制作の概要

当初の構想は、学期始めに数週間（もしくは数日間に凝縮して）3回程度、複言語主義に立脚した外国語の導入授業を行い、その効果を検証するというものであった。その際、念頭にあったのは、言語学的知見をベースにして、様々な言語現象が典型的に現れる諸言語の具体例を示しつつ、世界の様々な言語への理解を深め、いわばメタ言語的感覚をつけさせることによって、第二外国語、第三外国語の習得を容易かつ効果的なものにしようというコンセプトであった。幾つか具体例を挙げると、「文字と言語」「発音と音素」「『格』の話」「言葉に表れた『時』」などである。このコンセプトにしたがって数項目を試作してみると、なるべく分かりやすく具体

---

3) 『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参考枠』(Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, Assessment) 欧州連合における言語政策の理念と実践的提案の書。略称CEFRと呼ばれる。

的に書くという趣旨にもかかわらず、導入授業向けとは言い難い堅苦しい内容になった。

序で述べた『複言語コミュニケーションクラス』での経験を踏まえ、このような形の教科書を使って導入授業を行うことはあまり効果的でないと判断した。そこで、教材は1時間程度の授業で終えられるボリュームに減らし、様々な教員の使用に堪えるように極力薄いパンフレット形式のものとした。内容も当初の言語学的知見を前面に押し出したものから、個別言語の比較・対象に重点を移し、カラフルな図式や写真を増やし見て楽しいものにして、学生の関心を惹きそうなトピックスを並べ、英語以外の外国語にも学生が興味を抱くことに主眼を置いたものとした。こうした大幅なコンセプトの変更を経て、2007年の末に教材の大枠が作られた。

2008年に入り、スタッフの増員を図り、慶應義塾大学の心理学教員高山緑、神奈川大学のロシア語教員小林潔が加わった。さらに会議記録の整理等の補助を慶應義塾大学文学部学生の高崎早南に依頼することにして、実質的な教材作成の作業に入った。この後、作業の効率化を図るため、さらに5名のスタッフにも作業グループに加わってもらった<sup>4)</sup>。

最終的に完成されたパンフレット教材は、当初企図された大枠に沿ったものではあるが、実際の作業過程においてメンバーの意見を反映する形で多くの修正が施されている。例えば始めはまだかなり色濃く残っていた言語学に関する記述が背後に退き、かわって学生の興味を引きそうなトピックスが散りばめられ、文章記述を極力減らしてその代わりに図版や表・統計を大幅に増やした。一例を挙げると言語における「音」の扱いにしても、「音」と「文字」あるいは「音」と「音素」について言語学的側面から述べるのをやめ、挨拶等の具体例に則して「音」を発音させる、Webサイ

4) 倉館健一（慶應義塾大学外国語教育研究センター専任講師）、須藤真季（同大理工学部非常勤講師）、佐野彩（同大外国語教育研究センター常勤研究補助員）、加留部秀岳（同大理工学研究科修士課程）、岸悠一（同大文学部英米文学専攻）

トを利用して様々な言語音を聞かせるなど親しみやすいものとなった。その結果、当初イメージされていた簡素で地味な冊子体という体裁から視覚的効果を考えたグラフィックな紙面作りとなっている。

教材と平行して、実験授業に際して用いられるアンケートの作成が行われた。これに関しては、これまで数々の教育関係のアンケート調査をやった経験から高山が中心になって進められた。アンケート用紙は、1、2回目用として16項目A4版1ページのものと、3回目用として上記16項目に、自由記述の回答を含む15の設問を付け加えたA4版6ページのものを作成した。これを用いて、1、2回目は実験授業の前後に、3回目は学期末に調査を行なうこととした。

教材から説明等の文字情報を大幅に削減したため、授業の際に教師の解説が必要となる部分がかなり出てくる結果となった。そこで、使用上の便宜を考えて「複言語主義」などのように馴染みのない概念や、各種専門用語、各言語独自の情報等に解説を付け、さらにパンフレットに掲載した統計や具体例を補う資料を載せた「教師用資料集」も併せて作成した。この資料集は最終的にA4版26ページにわたるものとなったが、実のところ、この資料集を添付することにも今回の研究プロジェクトの工夫が込められている。教材としてのパンフレットにはこの資料集の内容を精製し、極めてシンプルな形で盛り込んだ。完成したA2版四つ折り8ページ仕立て両面カラー印刷のグラフィックなパンフレットは、この大部の資料集を必要最小限のエッセンスにまとめたものとして、単なる多言語紹介パンフレット以上のものになっている（P.77-78の図版参照）。

### 1.3. 導入教材《複言語のすすめ》開発の理念

外国語学習用導入教材『《複言語のすすめ》+Xで世界をひらく——言葉は異文化への扉——』は、はじめにも触れたように第二外国語授業の導入教材として開発された。表題からも分かる通り、この教材は複言語主義の立場に立って作られている。まず「複言語主義」について簡単に触れて

おきたい。

複言語・複文化主義は、欧州評議会（46カ国）が30年の歳月をかけて議論・検討した結果を踏まえて練り上げた「外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参考枠（CEFR）」（2001）の基本理念である。その前提となるのは、「ヨーロッパにおける多様な言語と文化の豊かさは価値のある共通資源であり、保護され、発展させるべきものである。また、その多様性をコミュニケーションの障害物としての存在から、相互の豊饒と相互理解を生む源へと転換させるために、主たる教育上の努力が払われねばならない」<sup>5)</sup>という認識である。「複言語」という言葉は日本ではまだあまり馴染みのない表現であるが故に「多言語」という表現と混同されがちであるが、多言語が「多くの言語が一社会の中に各々独立した状態で存在すること」であるのに対し、複言語とは「複数の言語が、一個人の中でコミュニケーション能力として補完的・有機的に結びついた状態で存在すること」を意味する。したがって、そこには「複言語主義は多言語主義と異なる。後者は複数の言語の知識であり、あるいは特定の社会の中で異種の言語が共存していることである。多言語主義は単に特定の学校や教育制度の中で学習可能な言語を多様化すること、または生徒たちに一つ以上の外国語を学ぶように奨励したり、あるいは国際社会における英語のコミュニケーション上の支配的位置を引き下げることで達成され得る。一方、複言語主義がそれ以上に強調しているのは、次のような事実である。つまり個々人の言語体験は、その文化的背景の中で広がる。家庭内の言語から社会全般での言語、それから他の民族の言語へと広がって行くのである。しかしその際、その言語や文化を完全に切り離し、心の中の別々の部屋にしまっておくわけではない。むしろそこでは新しいコミュニケーション能力が作り上げられるのであるが、その成立にはすべての言語知識と経験が寄与するし、そこでは言語同士が相互の関係を築き、また相互に作用し合つ

---

5) 『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参考枠』、p. 2

ているのである。」<sup>6)</sup> とする基本認識がある。

我々が今回、「複言語主義」の立場に立って第二外国語学習導入教材を作ろうと思い立ったのは、何よりも「多様な言語と文化の豊かさは価値のある共通資源であり、保護され、発展させるべきものである」という考え方と共に鳴したからに他ならない。日本の外国語教育において、英語以外の第二外国語教育は、残念ながら極めて軽視されているのが現状である。筆者はドイツ語教員であるが、常日頃からこの個人的利害を超えて英語以外の外国語軽視に危惧と憂いを覚えている。その一番の理由が、文化における多様性の崩壊である。生態学的には、多様性に富む種ほど生き残る可能性が高いとも言われるが、「多様性が人類の成功の前提条件であるなら、言語の多様性を保つこともきわめて重要なことである。言語は人間を人間たらしめるものの中心にある。多様な文化の発展が重要だとするなら、そこで言語が果たす役割は決定的である」<sup>7)</sup> からである。「言語は、それぞれ独自の構造をもっており、その言語構造は、その言語を母語とする話者の思考や認識に影響をおよぼす、あるいは思考や認識を決定する。」<sup>8)</sup> とするサピア・ウォーフの仮説を持ち出すまでもなく、人類の思考の物差しが減少することは文化の平板化を招くことになるだろう。クリスタルはその著書の中で「二言語（あるいは多言語）使用者は、生活の大きな部分で二つ（またはもっと多く）の非常に異なった視点をもつことが永続的に可能である。そして、单一言語使用の人々であっても、多文化との接触の歴史を反映する外来語を含む言語を用いているという意味において、歴史的に見て多言語使用者である。」<sup>9)</sup> と述べているが、このコンテクストで「多言語」は「複言語」と表現されるべきであったろう。

それでは、複言語主義を基本理念として作成された導入教材《複言語の

---

6) 同前, p. 4

7) クリスタル 『消滅する言語』, p. 48

8) 『言語学大辞典』三省堂, p. 602

9) クリスタル 『消滅する言語』, p. 49

すすめ》の構成と具体的内容を、以下に示してみたい。

### 1. 3. 《複言語のすすめ》の構成と内容

教師用資料集の冒頭には、このパンフレットの特徴として次のように書かれている：

- ①内容が楽しく、言語に興味を惹き起こすものであること（→学習意欲を生む）
- ②第3言語学習の必要性を明示していること（→学習することの意味を考える）
- ③原語での表記を適宜挿入したこと（→実物のサンプルによって知的刺激を与える）
- ④言語類型論や認知言語学の成果を取り入れたこと（→説得力のあるデータを示す）
- ⑤図や表などのデータを多く載せていること（→視覚に訴える）
- ⑥第3言語を学ぶためのヒントを示していること（→持続的な学習を可能にする）
- ⑦日本人の立場に配慮して作成したこと。（→日本人の現実に即した可能性を示す）

黒い表紙ページにはタイトルと様々な文字をあしらった「X」が大きく印刷されている。この「X」はもちろんサブタイトルの「+ X で世界をひらく」にちなんだものである。以下、各ページのタイトルと主な内容を簡単に紹介する：

p. 2 「世界で一番話されている言葉」：世界の母語人口（上位 20 言語）と世界の言語別使用人口（上位 10 言語）の紹介。

p. 3 「なぜ複数の外国語を学ぶのか？」：「多彩な文化は人類の宝」であること、「複数の言語知はメタ言語感覚を育てる」こと、「自分の夢と結びつく言語能力」の重要性などの項目についての短い文章。

p. 4 「街角の外国語」：現代日本の生活圏（ここでは特に首都圏）で目に入る様々な外国語のサンプル（駅の表示、商品の説明等）。

p. 5 「この言葉を話してみたい！」：テーマの中心は「音」であるが、具体的には「ありがとう」「さようなら」という挨拶と、「四季」の呼称をイタリア語・英語・スペイン語・中国語・朝鮮語・ドイツ語・フランス語・ロシア語の8言語で発音させ、文字と共に体験させる。

p. 6 「言葉の違いを比べてみよう！」：言語の文法・語彙構造に注意を向けさせるためのページ。ここでは、「文型」「名詞の性」「意味場」がテーマ。

p. 7 「まずこの一言を覚えよう！『サバイバルのための一言』」：イタリア語・英語・スペイン語・中国語・朝鮮語・ドイツ語・フランス語・ロシア語の8言語で「知っていればとても役に立つ」と思われる表現を掲載。

p. 8 「外国語を学ぶときの4つのヒント」：「異なる言語、異なる文化」をもつことの重要性、「言葉が違うことゆえに生じる面白さ」、「言葉は人間の脳に合わせて作られている」こと、「言葉は楽しみながら学ぶこと」が重要であることのアピール。

以下各ページごとに問題点の検討などを織り交ぜながら詳しく見ていくたい。

#### a) 表紙 (p. 1)

基本理念を表す「複言語のすすめ」という言葉と共に、「+ X で世界をひらく」というタイトルが大きく掲げられている。教師用資料集には、複言語と多言語の違いについて解説を付しておいたので、この点は教員から説明を受けることになる。「+ X」は無論ある不特定の外国語を指すわけで、常識的には「日本語+英語+X」と読まれるだろう。現代日本におけるミニマムスタンダード「日本語+英語」で満足してしまうのは、余りにもったいないし、つまらない。ここは、一つでも二つでも多くのXを身に付けて、未知の「異文化への扉」を開いて欲しい——というのが、このペ

ージに込められたメッセージである。ちなみに「+ X」という表現は当初「+  $\alpha$ 」としていたが、「プラス・アルファ」という日本語からは、どちらかと言えば「お添えもの」というイメージを払拭したいので、アクティブな意味合いをも含む、より一般的な「+ X」に変えた。

b) 「世界で一番話されている言葉」(p. 2)

「世界中に現在、約 6000 の言語があると言われています。そのうち、21 世紀末までに 90% の言語が死滅するのでは、とも言われています。」<sup>10)</sup> というショッキングな一句で、このページは始まる。実益のみにとらわれない言語学習者に対しては、自分が関心を寄せる個別言語の知識と並んで、言語一般についての知識を与えることは有益である。それによって、例えば自分が学ぼうとしている言語の世界言語中の位置づけ（話者人口、隣接する地域の言語、他言語との類縁関係など）を知るばかりではなく、自分の知らない言語がいかにたくさん存在するのか、あるいは現在の世界において話者の減少その他の原因からいかに多くの言語が消えつつあるのかといった現実に直面するからである。使用される地域が限定されているとはい、母語人口においてはドイツ語、フランス語を抜いて第 9 位という日本語の場合、母語が消滅するかもしれないという危機感を抱く日本人はほとんどいない。そうであるだけに、母語を失うことの意味を今一度考えてみる必要があるだろう。それは母語というものについて、さらには言葉そのものについてより深く考えることにつながるからである。クリスタルの『消滅する言語』は、そのような死を迎えることのある言語、滅びてしまった言語に関する記述に満ちており、考えさせられるところが多いが、著者が言語の死に関して引用しているマリ・ラドウェンの言葉は含蓄が深い：

10) マイケル・クラウスによる。“I consider it a plausible calculation that — at the rate things are going — the coming century will see either the death or the doom of 90% of mankind’s languages.” (Krauss, Michael: “The world’s languages in crisis”, LANGUAGE, vol.68, No.1, 1992, p. 7)

「言語の喪失は、概念や抽象的觀念の喪失ではない。人々が態度を変え、世代間で自分たちの言語を伝達することをやめてしまうときに起こる事態である。それは人と密接につながっており、ただの知能パズルを解くことと同じように扱ってはならない。」<sup>11)</sup> 言語の人間の生への関わり方の全体性という見方において、「言語を話すということは、ある活動の、あるいは、ある生活形式の一部なのである」<sup>12)</sup> というヴィトゲンシュタインの言葉とは明らかに親近性がある。言語習得を単に技術的なものとして扱いがちな現代の言語教育への警鐘と受け止めたい。

このページには、二つの統計を載せてある。一つは、世界の母語人口に関するもの、もう一つは言語別使用人口に関するものである。どちらの表も1位から4位までは空欄になっており、学生が言語名を書いて埋めるようになっている。順位は母語人口が1) 中国語 2) 英語 3) スペイン語 4) ヒンディー語、使用人口は1) 中国語 2) 英語 3) ヒンディー語 4) スペイン語が正解であるが、1位、2位は解答できても、3位、4位は同僚教員の間でも難しかった。教師用資料には、これ以外にも学生の興味を引きそうな統計を幾つか載せた。また、通常は全く馴染みのない言語名も多く、このようなものについては、使用される地域を教師用資料に明記した。情報の信頼性という意味で出典としてあげるにはいさかためらわれるウィキペディア（Wikipedia）であるが、これは2008年2月現在、

11) クリスタル『消滅する言語』, p. 36 ここに引用されている、マリ・ラドウェンの言葉は、N. Ostler 編の *Endangered Languages: What role for the specialist? (Proceedings of the Second Foundation for Endangered Languages Conference, 1998, Edinburgh)* の p. 106 にある。参考までに原文を記す。“Loss of language is not the loss of a concept, an abstraction, but rather it is what happens when people change their behaviour and stop transmitting their language intergenerationally. It is intimately connected with people and it cannot be treated simply as an intellectual puzzle to be solved.” (Mari Rhydwen: “Strategies for Doing the Impossible”)

12) Wittgenstein „Philosophische Untersuchungen“ 23., p. 250

256 の言語で執筆されている。

c) 「なぜ複数の言語を学ぶのか？」(p. 3)

このページの狙いは、学生に様々な外国語を学ぶことで自分がいかに豊かになるかを三つの項目を通してアピールすることにある。「多彩な文化は人類の宝」では、言語の多様性が文化の多様性を育み、多様性は生態学的観点から見ても重要であること。「複数の言語知はメタ言語感覚を育てる」では、言語はある意味で最大の文化遺産であること、そして複数の言語を学ぶことを通してメタ言語感覚が身につき、言語そのものへの理解が深まり柔軟で多元的な思考力を生むこと。最後に「自分の夢と結びつく言語能力」では、国際社会での相互理解に果たす言語の重要性を再確認し、そのためには相手の言語を話すことが大切であることを説いている。

「言語は文化遺産」という視点は極めて重要である。クリスタルは「もし、誰かがある言語の最後の話者になったとしたら、その言語は——意思伝達の道具として見れば——すでに死んでいる。なぜなら、言語は話し相手がいる限りにおいてのみ、真に生きているといえるからだ。言語共同体で最後まで生き残った人の言語知識は、仲間が話していた言葉の歴史の倉庫か公文書館のようなものだ。」<sup>[13]</sup> と述べているが、その意味で我々は重要な文化財の管理人なのだという意識は通常希薄である。同僚ドイツ人教員の H. J. Knaup は、学生たちに向かって常々「君たちが言葉を使うことは、日々文化財の虫干しをしているようなものなのだ。」と言い続けているが、何語であれ常に読み、書き、話し続けられねばならないというところに言語という文化財の特殊性がある。

メタ言語とは一般には「言語を分析・記述するために用いられる、より高次の言語」を指し「超言語、高次言語、説明言語とも訳される」<sup>[14]</sup> ものであるがここで「メタ言語感覚」と呼んでいるものは、対象から離れ

---

13) 『消滅する言語』, p. 5

14) 『言語学大辞典第 6 卷』三省堂, p. 1336

た高次の視点から対象言語を俯瞰し、客観的・相対的に言語内の関係や言語間の関係を理解するセンスを指している。「メタ言語意識 metalinguistic awareness」<sup>15)</sup>に近いものである。

これまでの議論とやや関心のあり方を異にするが、言語能力を自分の夢を実現させるための一手段と考えている学習者もいるに違いない。こういった場合、言語自身は直接的な関心の対象ではなく、あくまでも手段にすぎない。このような学習者にとって、言語習得とはどのような形をとるのだろうか？ 実は、このようなケースこそヨーロッパ共通参照枠（CEFR）の提唱する複言語主義にかなったものなのである。ここではコミュニケーションの実質が前面に出て、極論をすればもはや言葉それ自体は問題ではない。英語学者の斎藤兆史が英語力を例に、次のような面白い主張をしている。「イチローや松井が大リーグで活躍をしている。衛星中継などを見るかぎり、チーム・メイトとも談笑しているようだ。コミュニケーション中心主義を主張する人は言う。ああやってコミュニケーションを通じて学ぶのが本当の英語の勉強だ、と。／ そうじゃない。イチローや松井だから、ああいう英語で済んでいるのである。彼らには、野球選手として世界に通用する一流の技がある。極端な話が、彼らは英語など器用に話せなくとも、バッターボックスに立てさえすれば、それで仕事ができるのである。つまり、一流の技を持つことで、英語から自由になっているのだ。」<sup>16)</sup>（言葉を使うことが中心とならない仕事で）相手と気持ちを通わせながら業務をなんとかこなしていくというレベルの外国語は、CEFRの評価基準に照らしてみた場合、決して高いレベルで複言語の扱い手になっているとは言えないが、少なくともその精神は体現していると言えるだろう。確かに、これまでの日本の外国語学習には「語学」という言葉の響きにも感じ取れるような、ある種の固さがあったことは否めない。序章で触れた、『複言語コミュニケーションクラス』において、のびのびと授業

15) 『現代言語学辞典』成美堂, p. 389

16) 斎藤兆史『日本人に一番合った英語学習法』, p. 178

を楽しんで、語学の授業は「学習の場というよりは体験の場」なのだと思い至った学生の姿を思い出す。ただし、それでは日本における「複言語主義」とはこのようなものを目指すべきかというと、それは、また別の話である。多くの日本人がイチローや松井ではないからである。これについては、後の「考察」の部分で改めてじっくり考えてみたい。

d) 街角の外国語 (p. 6)

ここでは、現代日本の日常生活で普段何気なく目にしている外国語を再認識することが目的である。近年、特に大都市圏ではJRをはじめとする駅構内の表示にこれまでの英語に加えて、中国語と朝鮮語による表記がなされるようになってきた。土地によっては、仕事上の関係から上記以外の外国語を母語とする外国人が多数居住していることで、他の外国語表示が見られることもあるようだ。本パンフレットでは、東京都心で目についた外国語表示の写真を掲載してある。使用されている言語は、日本語、英語以外に、中国語、朝鮮語、ロシア語、アラビア語、フランス語、ドイツ語、スペイン語である。この中、インフォメーションで配布される観光地図を別にすると、普通に見られる表示は英語、中国語、朝鮮語の3か国語のみである。パソコンなど電子機器の取扱説明書には相当数の外国語が表記されているのが認められる。また、輸入菓子等のパッケージにも色々な外国語が併記されていて面白い。

e) 「この言葉を話してみたい！」(p. 7)

色々な言語の「音」を体験してもらうことを意図したこのページは、個々人の各言語イメージを確認するところから始まっている。冒頭に「愛を囁くなら [ ] 語」「学問を論ずるなら [ ] 語」「歌を唄うなら [ ] 語」「神と語るなら [ ] 語」「詩を吟ずるなら [ ] 語」という各国語に関して巷でよく聞かれるフレーズが掲げてあり、

空欄を埋めるようになっている。このような設問を立てるにあたり、こちらとしては、まず言語音について各人の言語イメージを意識化してもらい、以下で幾つかの単語を実際に発音してもらった上で、そのズレを検証させたいという意図がある。ちなみに、このいまや陳腐とも思える表現は16世紀に「日の没することのない帝国」を築いたカール5世が「男性にはフランス語で、女性にはイタリア語で話し、神にはスペイン語で話し、馬にはドイツ語で話した」<sup>17)</sup>という言い伝えに基づいているようだ。18世紀ロシア啓蒙期の学者・詩人で、モスクワ大学の創設者でもあったミハイル・M・ロモソーノフは、このカール5世の言葉を引用した後、次のように付け加えている：「しかもしも彼がロシア語に通じていたならば、ロシア語はこれらすべてと語るに相応しいと付け加えたであろう。彼はロシア語の裡にイスパニア語の壮麗さ、フランス語の生彩、ドイツ語の堅固さ、イタリア語の優雅さに加えてギリシア語やラテン語の表現における雄勁な簡素さを見出したであろうから」<sup>18)</sup>

ここで学習者に具体的に体験させるのはイタリア語・英語・スペイン語・中国語・朝鮮語・ドイツ語・フランス語・ロシア語の8言語である。挨拶の言葉二つ「ありがとう」と「さようなら」、それに「春・夏・秋・冬」を加えた計6単語を原語表記とカタカナによる振り仮名を参考に、発音させてみる。その際、担当教員が必ずしもここに使われた全ての言語に通じているとは期待できないので、言語音の再現の正確さという点では問題があるかもしれない。<sup>19)</sup>しかしながら、少なくとも今回の試みの「色々な言語を体験させる」という意図のもとでは、多少不完全であっても出来る範囲内で色々な言語に近づくことこそ重要であると考えている。事実、今回の実験授業では、かなりの数のクラスでこの部分を教師・学生共々に

17) クリスタル『言語学百科事典』, p. 13

18) 山口巖『ロシア中世文法史』, p. 128

19) 本来ならば、これらの言語音を全て収録したメディアを添付すべきではある。今回は、残念ながらそこまでの時間的余裕がなかったためできなかった。

楽しんだと聞いている。

また、原語文字を併記したことで、使用される文字の一部、音と表記の関係が視覚的に体験されることになる。漢字検定試験が人気となる昨今の風潮のためか、文字に対する学生の関心は想像以上に高い。今後文字を中心のテーマに据えたこのような教材を作ることも考えられよう。今回の8言語では、ハングルとキリル文字が際立って他の言語表記と異なっていたが、細かい点であるにもかかわらず中国語の簡体字や、スペイン語、ドイツ語、フランス語のアルファベットに付された補助記号にも注意を向ける学生がいたことは確かである。

外国語好きの学生の中には、どちらかというと言葉の抽象的側面（文法や言語学的知識）に興味を抱く者と、具体的側面（発音とか言葉の具体的使用法）により興味を持つ者とがいる。従来のスタンダードな第二外国語習得の初級用カリキュラムではどうしてもこの具体的側面に費やす時間がないがしろにされる傾向にあり、後者のグループの学生で始め実に熱心でありながら後半になって興味を失っていった例を筆者は多々目にした経験がある。冒頭に紹介した実験授業の分析にもあった「学生の興味が言語を通して地理的・歴史的な広がりをもった言語文化に向かってゆく」という事実と併せて、言葉の具体的な側面（言語音、文字、言葉の歴史、隣接言語など）の扱いにもう少し時間をかけてもよいのかもしれない。

なお、このページではインターネットを使って世界の言語を自分の耳で聞いてもらおうと、NHK、BBC、VOAなどのWebサイトのアドレスを紹介している。NHKで18言語、BBCで33言語、VOAで54言語を聞くことが出来る。

#### f) 言葉の違いを比べてみよう！

文法・言語学的側面に焦点を当てた設定である。ここでは言語類型論、文化人類学、認知言語学、対照言語学といった視点から1)「主語（S）」「目的語（O）」「動詞（V）」の順序に着目した世界の言語の分類、2) ヨーロッ

パの言語に見られる名詞の性の違い, 3) 日本語・中国語・英語・ドイツ語・ロシア語・フランス語での意味区分の比較, の3テーマが選ばれている。

1) の語順については、タイプ別のパーセンテージを示すと SOV (約 50%), SVO (約 35%), VSO (約 10%), VOS (約 3%), OSV (約 1%), OVS (約 0.5%) となり<sup>20)</sup>、世界的に見ると日本語の属する SOV 型言語（他にヒンディー語、トルコ語、朝鮮語など）が、英語、フランス語、ドイツ語の属する SVO 型言語より優勢であるという統計は、学生にとっても新鮮な驚きであったようだ。比較的耳にすることの多い「日本語は非論理的で特殊な言語である」といった言説も、こと語順に関するかぎりこうした統計の前では影が薄くなる。<sup>21)</sup>

2) では、ヨーロッパ言語における名詞の性の比較表を掲げ、言語によって性別の違いがあることを示している。具体的には、イタリア語、スペイン語、ドイツ語、フランス語、ロシア語で「太陽」「月」「山」「川」「水」がどの性を取るか表にまとめた。「文法的な性の起源については、定説も通説もない」<sup>22)</sup>のが現状であるが、言語を学び始めた学生がまず興味を覚えるトピックの一つである。教師用資料集には、学生に対する話題提供という意味で、ヘルダーに始まりグリムによって広く知られるようになった、象徴的起源論（アニミズムの精神から発した「強大で、活動的なもの」）は

20) コムリー『世界言語文化図鑑』, p. 19, カッコ内の数字は、松本克己著『世界言語の視座・歴史言語学と言語類型論』, p. 211 に掲載されているものを参照した。

21) 英語の論理性については、斎藤兆史が興味深い説を述べている：イギリスの植民地政策によって世界的に広まり、多くの人が使用するようになった英語は、民族・文化的な違いによって誤解が生じないよう、できるだけ言葉の論理性によって意味を伝達する言語になった。よく英語は論理的な言語だと言われるが、そうではない。そのような事情により、論理的に使わざるを得なくなったのだ。斎藤兆史『日本人に一番合った英語学習法』, p. 137-138

22) 近藤健二『言語類型の起源と系譜』, p. 249。以下、文法的性に関する記述は、同書を参照した。

男性的、「纖細で、優しく、柔らかのもの」は女性的といったイメージが無生物にまで拡張したと説く), もう一つはブルックマンの「文法的性は、元来、接辞の類推から生じたもので、接辞の違いによって区分される」<sup>23)</sup>という説を挙げてみた。

3) では言語ごとに異なる単語の意味区分の例として、日本語の「兄と弟」「稻、米、ご飯、ライス」が中国語、英語、ドイツ語、ロシア語、フランス語でどのように対応するかを示した。ヨーロッパ言語に対し日本語と中国語がよく似た対応を示すのが文化圏の近さと言語の関係を示す好例となっている。教師用資料には、この他「蛾と蝶」の区別<sup>24)</sup>、ピントウピ語（オーストラリアの土着言語）の「穴」の区別、15個の格を持つ言語（フィンランド語）、4人称を持つ言語（アルゴンキアン語族－北米インディアン）、数詞の問題などを挙げた<sup>25)</sup>。

g) まずこの一言を覚えよう！「サバイバルのための一言」

概要でも述べた通り、極めて実用的な情報を提供するページで、旅行の時などにこの一言を覚えておくと大変役に立つというフレーズを、各言語の担当教員に挙げてもらった。国ごとの社会事情が伺える面もあって興味深い。こうして各言語ごとに一言を挙げることは一見簡単に見えるが、実はそれほどやさしいことではない。語学教材をいくら読んでもそれぞれの言語で的確な一言を選ぶことは不可能である。慶應日吉キャンパスという様々な言語の専門家が揃っている場であるからこそ、それぞれの国的事情

23) 「その論に従えば、文法的な性というのは接辞の種類によって生まれたものであるという。すなわち mama「母」や gena「女」のような自然界における女性を表す語との類推によって、たとえば dues「神」から dea「女神」、equus「馬」から equa「雌馬」といった語が作られるようになった結果、男性接辞 - (o) s と女性接辞 - aとの対立が生まれたというのである。」近藤健二『言語類型の起源と系譜』、p. 249

24) 鈴木孝夫『言語文化学ノート』、p. 109-117

25) クリスタル『言語学百科事典』

を知った上で適切な表現を選んでもらうことができる所以である。このパンフレットには、 そうした慶應日吉ならではの長所も盛り込まれている。<sup>26)</sup>

#### h) 外国語を学ぶときの4つのヒント

「異なる言語、異なる文化」「違うことの面白さ」「言葉を使うのは人間」「楽しみながら、夢を持って」の四つの項目に分けて、複言語学習をエンカレッジする内容である。これまでのまとめともいえ、「異なった言語・異なった文化に親しむことが、人間の営みをより深く知ることにつながること」、「慣れ親しんだ言葉と違うから間違う、だからこそ面白いと感じるセンスが大切だとする視点」「どんな言語も人間の脳に合わせて作られているのだから、自然体で向き合えばいいという態度」「言葉を学ぶことで色々な世界の扉を開けられるという思いの大切さ」が語られている

資料集には、具体的な外国語学習のヒントを挙げたほか、日本語の特殊性と英語の特殊性に関する角田太作の論を載せた。それによれば、「日本語は非常に多くの面で、世界の諸言語と共通の特徴を持っている。(中略) ある面では、英語は世界的にも非常に珍しい言語なのである」として、その理由に以下のような論点を挙げている。1) 母音の数は5つである言語が最も多い。2) 語順に関してはSOV型が世界の言語の約半数。3) 疑問文を作るときに主語と動詞を倒置する。4) 疑問文を作るときに助動詞の助けを借りる。5) 主語が強く、仮主語がある。<sup>27)</sup>

母語も含めて、各言語に対する偏見を捨てることは、言語学習の際に必要不可欠な態度である。それは支配的言語の常識を相対化し、新たな言語

26) イタリア語、スペイン語、中国語、朝鮮語に関しては、この項目ばかりでなく、発音や表記その他についても、以下の各氏にご協力いただきました。文学部教授白崎容子、経済学部准教授工藤多香子、経済学部教授竹内良雄、法学部専任講師磯崎敦仁。

27) 角田太作『世界の言語と日本語』、p. 225-235。なお、1) と2) については柴谷方良、松本克己が先に指摘している。

的 地平に身を置くことを「面白い」と感じられる精神につながるからである。「言語の習得は、勉強というよりは体験なのだ」と学習者が感じることの大切さは、実験授業で得られた重要な観点であったが、間違うことは「失敗」ではなく「発見」なのだという気持ちを持つことで、外国語の学習はより楽しいものとなるに違いない。本パンフレットを通じて我々が伝えたかったメッセージは、「違いを楽しむ精神的大きさを持って欲しい」という一言に尽きるかもしれない。

第二外国語学習導入教材《複言語のすすめ》の骨子は以上の通りである。このような具体的教材作成の中で、常に我々の念頭にあったのは、冒頭にも述べたように「日本に相応しい複言語教育のあり方」を探ることであった。以下の章では、この論点を中心に据えつつ、日本における複言語教育の問題を考えてみたい。

## 2. 複言語教育の問題点と考察

「複言語主義」を本プロジェクトの指針に据えたのは、我々が「多様な言語と文化の豊かさは価値のある共通資源であり、保護され、発展させるべきものである」という考え方と共に鳴したからに他ならない。しかしながら、CEFRの主張にはこれと並んで、もう一つ重要な柱がある。それは、すでに触れたような、どちらかと言えば抽象的文明論ではなく、もっと、社会的・政治的要請に基づいた政策的側面である。その部分を少し長くなるが引用してみよう：

対話の当事者たちは会話の途中で言葉を別の言語に変えることもあるし、方言を使い出すこともある。互いに、自己を有する言語で表現し、また別の言語を理解することができる能力を利用するのである。さらに「未知の」言語の場合は、いくつかの既知の言語に関する知識を動員し、書かれたものであれ、話されたものであれ、そのテクストの意味を理解しようとする。(中略) こうした知識がある人は、仮にその

知識がほんの少しだったとしても、それを使って言語知識のない人を助け、共通言語のない個人同士の間を取り持つて、コミュニケーションを可能にするのである。こうした仲介になる人がいない場合でも、こうした人々は手持ちの言語知識・装備を総動員して何らかのコミュニケーションを取る事ができるかもしれない。その際（中略）その言語使用を極端に簡単にしたりして、何とかコミュニケーションを図るのである。この観点を探るならば、言語教育の目的は根本的に変更されることになる。（中略）新しい目的は、すべての言語能力がその中で何らかの役割を果たすことができるような言語空間を作り出すということである。<sup>28)</sup>

ここで目指されていることは、極めて実践的なことであることをまず確認しておきたい。言うまでもなく、CEFRの評価尺度はこの目的に沿って作られている。共通参照レベルの自己評価表があり、そこでは聴解力、読解力、コミュニケーション力、書く力などの項目について、どの程度の技能が求められるかが具体的に書かれている。評価枠自体は、この目的に沿ったものとしてよく出来ているが、問題はこのような方向性が日本における語学教育の枠組みとして適切か否かという点にある。この枠組みはあくまでもヨーロッパのおかれた言語状況を抜きにしては考えられない。欧洲連合が発足し、ユーロが共通通貨として制定されたとは言っても、複雑に入り組んだ国境線は今も単なる行政区域の境界線以上の意味をとどめ、それ以上に複雑な母語による言語境界線が走るヨーロッパの歴史の上にCEFRが成り立っていることを忘れてはならない。この辺りの事情を山川智子は次のように述べている：

2度の世界大戦で、自国が戦場となった経験を持つヨーロッパは、戦

---

28) 『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』、p. 4

争再発防止と異民族との平和的共生を重要な目的とし、言語政策もそれに合わせて立案されてきました。押し寄せる難民・移民の言語問題は大きな課題で、彼らに受け入れ国の言語を教え、社会に適応させようという取り組みが始まりました。言語学習が政策レベルでも非常に重要視され、エリート教育だけでなく、一般市民の入門教育が必須の課題となりました。時代の要請に応じた言語学者たちの連携により、国境を越えた言語学習の共通シラバス（中略）がCEFに先立つものとして1970年代に開発されています。<sup>29)</sup>

CEFRの理念は、政策としてみた場合確かに美しく、崇高ですらあり得る。そのことは認めるとしても、例えば日本の大学での語学教育という具体的な状況を想定したとき、これがその指針となるとは思われない。先の章で触れた米大リーガーであるイチローや松井のエピソードを思い起こしてほしい<sup>30)</sup>。大リーグで求められているのは語学力ではないのである。「その言語使用を極端に簡単にしたりして、何とかコミュニケーションを図るのである。」といった方針は、少なくとも大学の語学教育の場に相応しいとは思われない。CEFRの複文化主義という考え方は、理念として我々の外国語教育、殊に第二外国語教育にとって有意味であるが、社会言語政策としてのCEFRを日本の第二外国語教育に直接反映させることには問題があると思われる。極めて現実的に考えて、減少傾向にある第二外国語の学習者を呼び戻せるならいいのではないかという意見もある。そのような学生の反応を、我々はあの実験授業『複言語コミュニケーションクラス』でごく身近に経験したのは事実である。とにかく、まず外国語を学ぶ楽しさを教えることが大切なのだという主張も聞こえてきそうである。

29) 山川智子 『「複言語主義」(plurilingualism) という概念、そしてそれが生み出された背景どのようなものだったのでしょうか?』: 河原俊昭・山本忠行編『多言語社会がやってきた』, p. 96-97

30) 本論文, p. 60

しかしこのような主張は、実はCEFRとは何の関係もない。上述の実験授業の分析に際し、「多言語」という授業コンセプトゆえに「面白かった」のか、個性的で素晴らしい教授法ゆえに「面白かった」のか」が問題となつたのと同じことがここでは問われている。我々は勘違いをしてはならないのである。

実験授業の学生のコメントからも強く感じられたことであるが、最近の社会的風潮として、コミュニケーション力、特に音声を通したコミュニケーション力の強化を求める声が強い。これは、英語教育においては、より声高に求められており、「オーラル・コミュニケーション科目」の効能はある種の幻想にまで高められているといつても良いほどである。<sup>31)</sup> この手のいわゆる「会話」の授業というのは、即効性と実効性に富む面があるため、学生を引きつけやすく、人気もある。語学の授業項目を「飴と鞭」に分けるとしたら、さしづめ「飴」となるであろう。事実、筆者自身も学生時代大いに魅力を感じたし、また教師となった現在でも、授業の活性化を図るため、折に触れて通常の授業に挿入することがある。ただし、このような風潮の中で、筆者が危惧するのは、複言語主義教育という名の下に、第二外国語の授業が安易な「会話」重視のコミュニケーション教育に引き下げられてしまうことにある。コミュニケーション能力の養成を図るのは悪いことではない。また、授業にそのような要素を取り込んで学生を引きつけるのも一つの教育的な方法ではある。しかし、第二外国語に割り当てられた少ない授業時間数で将来にもそれなりに残る語学力をつけるには、文法力は不可欠の要素である。同時通訳者としても著名であった鳥飼玖美子は、次のように文法の大切さを述べている：

「習うより慣れろ」ではなく、「慣れるまで習え」というのが外国語学習です。話すときには文法を意識しないほうがいい、ということは文

---

31) 鳥飼玖美子『危うし！ 小学校英語』参照

法を知らないくてよい、ということにはならないのです。<sup>32)</sup>

この教育の根幹に関わる部分を、見せかけの「複言語主義的」語学教育に譲り渡してはならない。

従来の第二外国語教授法にも多くの問題があったことは事実であろう。そして、もしかするとそれが第二外国語の衰退を招いた一因なのかもしれない。しかし、授業の方法を改善することと、授業の目標設定を変えることは別の次元の話である。この点を見極めることは、重要である。「コミュニケーション能力」一つ取ってみても、実は「コミュニケーション能力の育成」イコール「オーラル・コミュニケーション教育」とはならない。

野崎歓はフランス語教師という立場から次のように述べている：

いま、中学・高校の英語の授業では文法が極度に切り詰められ、会話のパターン練習ばかりが幅を利かせているらしい。会話が大事でないというのではない。会話のみを重視することで、書き言葉への通路が断たれるのではないか。それが心配だ。日本語でさえ読み書き能力の貧困化が深刻な現在、薄っぺらな会話中心の語学は若者の言語能力の衰弱に拍車をかけるのではないか。書物を媒介に大昔の人間とでも対話できることこそが本当のコミュニケーション能力であり、語学の最大の喜びもそこにある。<sup>33)</sup>

外国語学習の楽しみを教えることは必要であるが、それ以上に、基礎的な語学力をつけてやることが必要なのではないか。「日本に暮らしているかぎり、英語でしゃべる機会など多くはない以上、まず目指すべきはベーシックな英語を書く力なのではないかとも思う。インターネットで誰でもが軽々と国境を越える時代、それはたしかにやしなうべき能力となってくれる」。

32) 同前, p. 154

33) 野崎歓『われわれはみな外国人である』, p. 221

るだろう。」<sup>34)</sup> 同様のことが第二外国語教育にも当然当てはまるのではないか。我々は、行き詰まった感のある教育上の問題を自らの手で解決することを怠って、渡りに船とばかり CEFR を錦の御旗として問題を丸投げにしようとしてはいないだろうか。少なくとも高等教育機関のカリキュラムとして考えた場合、CEFR の考え方を丸ごとその指針として採用することには問題が多い。

では、「日本にふさわしい複言語教育のあり方」として、我々はどのような途を取るべきなのだろうか。筆者が注目したいのは、上に記した CEFR の最後の引用部分である：

「新しい目的は、すべての言語能力がその中で何らかの役割を果たすことができるような言語空間を作り出すということである。」

ここで想定されているのは、もちろん現実のヨーロッパの言語状況を踏まえた多言語が有機的に飛び交う具体的コミュニケーションの場（例えば作業、取引、研究、遊びの場など）である。このような空間は、人為的な操作をしなくともヨーロッパにおいては自然発生的に成立しうる空間である。我々が日本でこのような場を設けようすれば、ごく一部の例外を除き、かなり人為的・意図的な努力が必要となろう。そうやって（例えばキャンパス内などに）作られた実験室のごとき「人工的複言語空間」は教育的な試みとして一定の意味はあるが、あくまでカリキュラムの一環でしかない。我々が日本に求める「複言語空間」は、実はもっと別の場、ある意味ではもっと身近なところにあるのではないだろうか。

日本に相応しい「複言語教育の場」、もしくは「複言語空間」というのは実は教養教育の場にあるのではないかというのが筆者の主張である。日本において複言語が大きな意味を持つのは、実際的社会空間というよりは、

---

34) 同前, p. 244。

知的教養空間においてであろう。これは、日本文化が在来の異種文化を積極的に採り入れて独自の発展をしてきたという歴史的側面とも無関係とは言えない。日本語における四種類の文字併用という現実も一例として挙げられるかもしれない。こういった複言語のあり方を体現した一つの典型としては、多少古い例となるが、森鷗外などいわゆる「和魂洋才」の系譜に連なる人々を考えることができるだろう。これらの人々は、おしなべて複言語を体現していたのではないかと思われる。彼らは、和書漢籍の十分な素養の上で外国語の知識を駆使して、翻訳なり創作なりの仕事をしたのである。鷗外自身は、留学の経験もあり、会話力を含む実践的語学力を持ち合わせていたが、書物のみを通じて外国とコミュニケーションを取っていた同時代人も多かったに違いない。しかし、彼らもまた立派に複言語状況に身を置いていたと思われてならない。夏目漱石のイギリス留学にまつわる数々の逸話は、彼が実践的語学力にどちらかといえば恵まれていなかったことを窺わせるが、だからといって漱石に英語力がなかったと大真面目で主張する人はいないだろう。鷗外はもちろんのことであるが、漱石もまたその作品の中に、見事な複言語世界を作り上げているのである。複言語とは「複数の言語が、一個人の中でコミュニケーション能力として補完的・有機的に結びついた状態で存在すること」であるとする複言語主義の原点に立ち返って考えるならば、その有り方は極めて個人的で多様なものであって、個々人の、さらにはその個人の置かれた社会状況によって違つてよいことになる。明治・大正時代と現代とでは社会・文化のあり方、殊にメディアのあり方が大きく異なっているため、そこに介在する外国語のあり方も単純に比較することはできない。グローバル化の流れの中で外国との接触も密になり、その意味で「オーラル・コミュニケーション能力」が求められるのも理解できないわけではない。しかしながら、「CEFRの複言語主義」が目指す、社会的現実に即した実践的外国語教育には、「鷗外・漱石時代の複言語」に見られるような文化の根幹に触れるがごとき深さは感じられない。いささか古めかしく響くかもしれないが、日本にお

いて第二外国語、第三外国語の習得を通した複言語教育を行うことに意義があるとすれば、それは教養教育に資することをおいて他にない。そして、それこそが日本に相応しい複言語教育のあり方であると筆者は信じている。<sup>35)</sup> まして、それが大学教育の中でなされるのであれば、単なる技術以上の意味を持つべきであろう。それは単に技術的レベルにとどまるものではなく、精神の糧となるべきものだからである。

### 3. 結語

逆説的に聞こえるかもしれないが、日本において複言語教育が行われることの意義は、日本がヨーロッパのような社会的条件の制約を負っていないことにあるのではないか。我々がもしCEFRの掲げる複言語・複文化の理念を尊いと思うのであれば、我々はそれをもっと自由な立場から展開すべきであろう。現実的要請に迫られることで進歩する能力があるのは事実であって、狭い意味での語学力の向上もある面でこれと軌を一にする。しかし一方、現実に拘束されることで見えてくるものもある。真にグロ

---

35) 翻訳の問題をめぐって、野崎歓は次のように述べているが、これもまた複言語のあり方の一つであり、このような視点は教養教育を豊かにする上で欠かせない：「しかし外国語遣いになり、ともかくも言葉の境界を行き来するようになると、逆にはぼくらは自国語に対しても幾分か「外国人」たらざるをえなくなる。(中略) さらにはまた、二言語の往還を続けるうち、「翻訳家は自国語でも、翻訳するために身に付けた外国語でも、ついぞ我が家に落ち着いたという気分にはなれない。」(『G.スタイナー自伝』工藤政司訳・みすず書房)。言語とはすべて外国語であり、われわれはみんな外国人なのだ——究極的にはそうした認識が待ち受けているのだが、しかもそこに「バベルの塔以降」の人間だからこそ享受できる冒險の可能性があるのだと思う。世界がどれほどグローバル化しようが、言語の複数性は決して平らにならしてしまうことのできない現実としてぼくらの前に屹立し続けるだろう。つまり「外国人」であることのスリルと面白さがぼくらから奪われることはあるまいということだ。』『われわれはみな外国人である』、p. 265-266

一ernalizationを追求するのであれば、日本の中にもっと色々な言語に通じた人がいることが望ましい。つまるところ、日本の複言語教育は多くの日本人が世界の言語・文化に対して開かれた精神を持つことをこそ目指すべきだ。そして、それはいつか豊穣な文化を生み出す土壤となるに違いない。

2008年4月、パンフレット《複言語のすすめ》を使った実験授業が約400名の学生を対象に行われた。その内訳は、イタリア語3クラス、スペイン語2クラス、中国語3クラス、朝鮮語2クラス、ドイツ語4クラス、フランス語2クラス、ロシア語4クラスとなっている。<sup>36)</sup> 授業と平行して行われたアンケート調査はすでに回収が終わり、これから集計と分析の作業にはいるが、この分析結果の公表とそれに基づく考察は稿を改めて述べることにしたい。

## 参考文献

- 河原俊昭・山本忠行編『多言語社会がやってきた』くろしお出版、2004
- クリスタル、デイヴィッド（斎藤兆史・三谷裕美訳）『消滅する言語』中公新書、2004
- クリスタル、デイヴィッド（風間喜代三・長谷川欣佑監訳）『言語学百科事典』大修館書店、1992
- コムリー、バーナード他（片田房訳）『世界言語文化図鑑』東洋書林、1999
- 近藤健二『言語類型の起源と系譜』松柏社、2005
- 斎藤兆史『日本人に一番合った英語学習法』祥伝社、2003
- 鈴木孝夫『言語文化学ノート』大修館書店、1998
- 角田太作『世界の言語と日本語』くろしお出版、1991
- 鳥飼政美子『危うし！ 小学校英語』文春新書、2006
- 野崎歓『われわれはみな外国人である』五柳書院、2007
- 松本克己著『世界言語の視座・歴史言語学と言語類型論』三省堂、2006

36) 実験授業には、以下の方々のご協力をいただきました（敬称略）：磯崎敦仁（朝鮮語）、小野文（フランス語）、工藤多香子（スペイン語）、小林潔（ロシア語）、境一三（ドイツ語）、白崎容子（イタリア語）、竹内良雄（中国語）、林田愛（フランス語）、横山由広（ドイツ語）

- 山口巖『ロシア中世文法史』名古屋大学出版会, 1991
- 吉島茂・大橋理枝他 訳／編 『外国语の学習, 教授, 評価のためのヨーロッパ  
共通参照枠』朝日出版社, 2004
- 『言語学大辞典』三省堂, 1996
- 『現代言語学辞典』成美堂, 1988
- Krauss, Michael “The world’s languages in crisis”, LANGUAGE, vol.68, No.1,  
1992
- Rhydwen, Mari “Strategies for Doing the Impossible”, N. Ostler 編  
Endangered Languages: What role for the specialist? (Proceedings of  
the Second Foundation for Endangered Languages Conference, 1998,  
Edinburgh)
- Wittgenstein, Ludwig „Philosophische Untersuchungen“, Ludwig Wittgenstein  
Werkausgabe Bd. 1, Suhrkamp, 1984



## なぜ複数の外国語を学ぶのか？

### 多彩な文化は人類の宝

今、世界でたくさんの言語が使われています。  
多くの言語で会話することができます。  
世界は日本文化と異なる文化で満ちています。  
世界中は、多様性に富む文化を学ぶ機会があります。

### 複数の言語知識はメタ言語感覚を育てる

言語は文化を育むのです。ある言語は人の文化です。  
複数の言語を身に付けることで世界を絶対的に見ることができます。  
これが目的は、日本や中国、新たに世界規模にフランスの影響を受け、  
さらに世界を変える力を持つ力を持っています。

### 自分の夢と結びづく言語能力

将来、自分の夢に向かって歩んでいきましょう。  
もしも現地で会話ができると大変便利になります。現地の外見は重要な要素です。  
自分が人から上回らしがって見せられるためには、服装知識が何十枚。  
羽織物を揃えるには、必ず洋服の知識を覚えることがとても重要です。



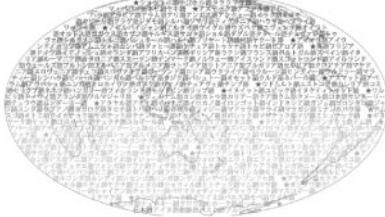
## 世界で一番話されている言葉

世界中に現在、約 6000 の言語があると言われています。そのうち、21世紀末までに 90% の言語が失われる予測されています。

Q. 以下の図標の言語を当てて下さい。

世界の母語人口（上位 20 の言語）		世界の言語別使用人口（上位 10 の言語）	
1	中国語	1	英語
2	ヒンディー語	2	中国語
3	ペルシヤ語	3	ヒンディー語
4	英語	4	ヒンディー語
5	アラビア語	5	ロシア語
6	ヒンディー語	6	フランス語
7	ヒンディー語	7	スペイン語
8	ヒンディー語	8	日本語
9	ヒンディー語	9	ドイツ語
10	ヒンディー語	10	フランス語
11	ヒンディー語	11	ヒンディー語
12	ヒンディー語	12	ヒンディー語
13	ヒンディー語	13	ヒンディー語
14	ヒンディー語	14	ヒンディー語
15	ヒンディー語	15	ヒンディー語
16	ヒンディー語	16	ヒンディー語
17	ヒンディー語	17	ヒンディー語
18	ヒンディー語	18	ヒンディー語
19	ヒンディー語	19	ヒンディー語
20	ヒンディー語	20	ヒンディー語

出典: Wikipedia ウィキペディアの世界言語



表ページ（上段左から右に P.1, P.2, 下段が P.3, P.4 となる

